

戦没画学生の遺作を鑑賞

初めて訪れた「無言館」

信州を巡る旅で、機会があれば訪れたかった「無言館」だった。97年に開館した前後に話題になり、興味を持っていった。「ほっとけい会」のほかの4人は6年前に訪れたようだが、この時は2日前に体調を崩し、救急車で病院に搬送され参加できなかった。今回、旅行プランを作成した準長老があらためてコースに加えてくれた。

「無言館」はコンクリート打ちっ放しの簡素な建物だ。薄暗い館内の壁にはスポットライトに絵画が浮かび上がっていた。自画像が目につく。死を覚悟して出征する自身の姿を残しておきたかった心情を察する。



ワサビの像に腰を下ろす辛味シェフ

穏やかに新聞を読む父親を囲むように描かれた一家団らんの絵は、作者の「最後の晩餐」だったに違いない。ガラスケースの中には、激戦地からの手紙類も、兄弟姉妹の健康を気遣う最後の手紙だったのか。

館外で待つ諸先輩と「介護士」を気にしながらも、充実した時を過ごせた。「無言館」を建てた窪島誠一郎は作家の水戸勉の子息。3年間かけて全国を巡り、戦没画学生の作品を中心に300点以上の遺作・遺品を集めたと聞く。順次、展示替えをしているのだから、機会があれば再訪したいものだ。

(原 征)

愛妻家の聖地に立ってみる

4人の素顔は恐妻家

どーいうわけか、「愛妻の鐘」「愛妻の丘」と、「愛妻」のつく2カ所を相次いで訪ねることになった。「左へ行くんじゃない」とか「いや、このまま真っ直ぐでいいんだよ」なんて言いながら死になって探して行かなければならない理由があるのだろうか？ 多少の疑問を持ちながら

も、ハンドルを握り、アクセルを踏み込む。初めて知ったが、群馬県吾妻郡嬭恋村は「愛妻家の聖地」なんだそうだ。日本書紀には、日本武尊がこの地で亡き妻を偲んで「あづまはや」と叫んだと記されているという。「あづまはや」を漢字で書くと「吾嬭者耶」。嬭恋村の「嬭」という字はここから来ていて、これが「わがつま」吾妻郡につながる。まさに「わが妻を愛する村」というわけだ。

マラインの北ルート沿いにある。ようやく探し当てた愛妻家の聖地に立ち、オジサン4人は何を思うのだろうか？ 本来は、男性が愛妻を抱きしめて変わらぬ愛を誓うスポットで、仕方がないからオジサン同士でハグしあっている。この4人の会話からは、愛妻家ではなく、極度の「恐妻家」としか思えないのだが。



愛妻の丘に立つ恐妻家4人

Y みんなの日ごろの行いが良いのか、3日間とも好天に恵まれたね。T 小生は天候に恵まれない雨男。春先の鹿児島旅行で何十年ぶりの大雪にぶつかった。K 今回の天候は晴れ女の私がいたからでしょう。雨雲も寄り付かない。O おかげできれいに晴れ上がった浅間山を拝めました。Y Hさんは旅行前に2泊ではなく、1泊の方がいい、と言っていたけど、体調でもどつか悪かった？ H 最近、朝起きる時、

めまいがする。医者に行っても何が原因なのかよく分からないんだけど。O そういえば宿でも壁際のベッドに寝ていたね。K でも、シェフは思ったより元気で安心しました。土産物屋に行っても店員やお客さんと話して、出てくるのはいつも最後です。O 小生は信州に住んでいるけど今度の鹿沢高原は初めてだった。Y キャベツ畑の真ん

楽しい旅に感謝

ほっとけい会放談会

中で、浅間山に向かっている？ T Hさんじゃないけど、みんな高齢だし、1泊2日でもいいのかも。O でも佐渡なんかじばいあつたけど、どこにも直売店がなかった。K 逆に紅葉はまだでしたね。Y Kさんを除くと平均年齢80歳の寿集団が、無事旅行できるのも、やはりドライバー兼介護士のKさんのお蔭ですね。全員 同感。Y とところで、これからの旅だけど、どうす

(構成・萩原 莞二)